



令和元年9月27日
佛教大学附属幼稚園

「心を耕す」

園長 田中典彦

二学期が始まって、園は日常を取り戻しました。やはり園は子どもたちがいてこそのものであると改めて感じました。子どもたちも私たちが待っていてくれたのでしょう。私の部屋の窓を7、8人でノックしてくれます。「話をしようよ」というのです。窓を開けてハイタッチしながら話をしました。「みんなどこへ行くの?」「いのちの森」。園の端っこにあるちょっとした林のことです。「そこで何をやるの?」「草やね、木があってね、虫もいっぱいいるんだよ」。「ねー、虫って何食べているのかなー」と聞かれたので、「土じゃない?」と答えたら、笑われました。

実はインドでは、大地つまり土が地上の多くのものを育てる力を持っていると捉えられていて、地藏(ksiti-garbha:クシティ・ガルバ)と呼ばれて崇められていたのです。それは土の創造力のことなのです。私たちの食べているものはすべて土の要素からなっているのです。野菜は土を栄養として育つのです。だから茎や葉っぱは土の要素からなっているのです。魚や肉も土の要素を食べてできているのです。だから、それを食べている私たちの体は水と土からできているわけです。

人間は早くからその力に気付いて、土を耕して作物を作ってきました。そしてそれを土の幸として感謝して食べてきたのです。土を手でひっくり返す(耕す)ことから得られるので「幸」(上下ひっくり返しても土、土)と表されているのだそうです。

その昔、ブッダがマガダという国のあるバラモンの村に滞在していました。そしてちょうど田を耕しているバラモン・バーラドヴァージャが仕事をしていたのでそこに行かれました。その時、バラモンは人々に食べ物を配給していたのです。傍らに立っていたブッダに「私は耕して種を播き、そして食べている。君も耕し種を播け、そして食べよ」と言ったのです。ブッダは「私も耕して種を播き、そして食べている」と答えた。バラモンはブッダのもとに鋤もなにもないのを見て、なぜそのように言えるのかと問いました。それに対してブッダは、修行によって自らを耕していると答えたのです。そして、「この耕作はこのようになされ、甘露の果実をもたらす。この耕作を行ったならば、あらゆる苦悩から解き放たれる」と。つまり心を耕すことから最高の幸せ(悟り)がもたらされると教えていると思われれます。

世の中には田畑を耕している人はそんなに多くおられません。私たちは田畑を持ち合わせていないのです。しかし、私たちはみんな幸せをもたらせる心と言う田を持っています。だから心は福田ふくだんとされています。

耕されず、調えられていない田畑には雑草が覆い繁るように、耕されず、

調えられていない心には自分だけが良ければという貪りむさぼりや、瞋りいか、迷い、苦しみが繁ります。耕され、調えられた田畑からこの時期のお米やお芋のように多くの幸がもたらされるように、耕され、調えられた心から幸せがもたらされるのです。

今は幼い、小さな、清らかな福田ですが、どんどん汚い水が流れ込み、雑草の種が芽を吹いてまゐります。それらを取り除くことができる力をも育むことも大切だと思えます。当園では心を耕すことも伝えていくようにしています。

